# 明治大正詩史概觀

北原白秋

# 明治大正漢詩史概觀

井土靈山

# 明治大正漢詩史概觀

## 僞唐詩時代

岸田吟香は嘗て日本におけるあらゆる詩集を支那の碩學愈曲園に送り、曲園はその詩集類を材料として『東瀛詩選』と題する尨然たる大詩集を選びそれを刊行した。これが支那において出版された日本詩集の始めである。その書中に次の如く云つて居る。

東國之詩。至二徂徠一而一變。蓋徂徠提二倡古學一。而服南郭又從而張レ之。於レ是家有二滄溟之集一。人抱二弇洲之書一。愈唱愈高。洋々乎盈レ耳矣。

成程この言の如く、日本の詩は徂徠に至りて一變したることは事實である。かく一變とは云ふものの實はその以前の日本の詩は露骨に云へば大體物になつて居らぬといふ方であつた。徂徠出でて明代の李王（李は李攀龍、字は于鱗、滄溟と號し、王は王世貞、字は元美、鳳州と號し、晩に弇洲山人と號す）の詩を鼓吹し、天下翕然として風靡した。徂徠は明の七才子その他の詩を選び『唐後詩』と題する詩集をも出版した。この『唐後詩』といふ意味は、唐以後には詩はない、その之あるは只明代ばかりであると云ふのである。何は兎もあれ識見と學問とを以て一代を壓倒しつゝある徂徠大先生の宣明なれば當時の學者詩人は一齊に拜服して了つた。

然るに茲に意外千萬なるは徂徠の門下から一大謀叛者が現れ出た。勿論それは徂徠の死後であるが、兎に角門下から謀叛者が現れ出た。それは誰あらう、太宰春臺である。春臺は徂徠の門下において經術には太宰春臺あり、文章には服部南郭ありと稱せられた程の人である。春臺は『文論』『詩論』の二書を著しこれを公にして、徂徠が奉じて以て金科玉條としたる李王二家の詩文の瑕疵を抉摘して木葉微塵に攻擊粉碎し去り、最後に次の如く云つて居る。

嗚呼。向使二徂徠先生不レ死十年一。必見二明詩之可レ厭。不二復好レ之。純非下敢違二先師一而立中異說上。昏愚偶見ニ明詩之大異ニ於唐詩ニ故也。

つまり徂徠先生がもう十年生きて居られたなら明詩と唐詩とは大に異つて居ることを知り、明詩の厭ふべきものであることを悟られたであらうといふのである。

世人、中にも護園一派（徂徠の學派）は驚異の目を以て春臺のこの叛旗を眺めたが、春臺の明詩攻擊も一理窟あるので、暫らくは五里霧中に陷つた形であつた。

## 僞宋詩時代

斯るところへ山本北山は明詩は「僞唐詩」であると喝破し、學ぶべきは宋詩であるといふことを唱へ出した。而して服部南郭などの盛んに振廻した『唐詩選』も僞物であると論じた。それ等の詳細は北山の著した『孝經樓詩話』だとか、『作詩志彀』だとかいふ書中に八ケましく論ぜられてある。

今その『唐詩選』が僞物で、明詩は僞詩であるといふ北山の言分はどんなことであつたかを知らうとする人々の爲めに『孝經樓詩話』中にある一二節を左に摘まんで見よう。

彼の邦にては『唐詩選』をば市井の賈人利を貪る者、李于鱗の名をかりて僞作せるものと片付けて學者は曾つて取りあはず、只鄉

塾の村夫子ばかり盛んに信じて童蒙に教ゆることと見ゆ、我が邦の老師宿儒と雖も僞物なるを知らず、奉じて詩作の規模とするもの今に絶えず、痛ましからずや。

右の如く云つて居るが、『唐詩選』の巻頭に掲げてある李攀龍の序文丈けは、確かに攀龍の文章であつて、『古今詩刪』の序文であるといふのである。それから明詩は僞詩であるといふ點に就いては左の如く『孝經樓詩話』に云つて居る。

明の詩人、多く盛唐を口實とし、句々雷同、篇々一律、その殊に甚しきものは李獻吉、李于鱗にあり、その極致たゞ盛唐の口拍子よきものを模擬剽竊するまでなり、これを名けて僞詩といふ、すべて僞詩に醉惑するものは生涯詩の眞趣を知らず。

山本北山はざつと右の如くに徂徠一派の鼓吹した明詩を攻擊して、新たに宋詩を鼓吹したのである。かくて明詩は衰亡して宋詩の時代となつた。

宋詩の擡頭は何人の力であつたかと云へば山本北山の力であつた。そのことは北山自身の書いた『楊誠齋詩鈔』の序文にも左の如く見えて居る。

毎下朋自二遠方一來訪。談偶及レ詩。必論二僞唐詩之故一。自笑似二馮婦攘レ臂。然是江戸之遺俠。猶不二全消一耳。

それから『五山堂詩話』には次の如くある。

山本北山先生昌言。排擊世之僞唐詩一。雲霧一掃。蕩滌殆盡。都鄙才子。翕然知レ嚮二宋詩一。其功偉矣。余謂二先生三曰。僞唐詩已盛矣。更有二僞宋詩一。可レ謂又生二一秦一也。

菊池五山は右のやうに、僞唐詩は亡びたが、更に又僞宋詩の現れ來たのはどうしたものだと云つて居る。僞唐詩に代りて新たに擡頭した宋詩をかくの如く僞宋詩と云つたのは、五山の駄ジャレとして片付ける譯には行かぬ。當時少しく識見ある人はかく思うたに相違ない。その實例として見るべきは柴野栗山や仁科白谷などの諸文あれども茲には略す。

## 明治時代

明治時代の詩の天下は一括して云へば森の天下であつて、その前半は春濤の天下、その後半大部分は槐南の天下であつたといふべきである。

詩風の上から明治時代は宋詩であつたか、それとも明詩であつたかと云へば、宋明を更に降りて清詩時代に一變した。勿論明治以前に大流行を極めた宋詩の餘毒は、明治は愚か、明和の今日までも殘存して居る。されども大勢から云ふ、時は明治時代は卽ち清詩の極盛時代と稱すべきである。かくの如く明治時代を清詩時代たらしめたのは森春濤である。尤も清詩の着眼は梁川星巖や賴山陽であつて、更に細かに見るならば星巖は『樊榭山房集』を枕中の祕とし、山陽は『隨園』を祕本とした。左樣なる細かしき動機は暫らく措いて、明治時代は森の天下で、清詩時代と見れば間違がない。

明治以前の宋詩時代には種々なる宋詩の詩集が出版され、それ等が散布して宋詩時代を拵へたのであるが、當時の詩集中において宋詩宣傳に最も功能の大であつたのは『三大家絶句』であつた。三大家とは楊誠齋、范石湖、陸放翁のことである。春濤は如何と見れば、春濤は清朝の張船山、陳碧城、郭頻伽の絶句を選び、これをば袖珍本として世に公にした。春濤自身としては前に云つた『宋三家絶句』の故智を學んだ譯でもあるまいが、兎もあれ春濤の『清三家絶句』は清詩の宣傳として最も功を奏したらしい。是れより以前に『清六大家絶句』とか又は『浙西六家詩鈔』などいふものが出版されて居

たが、春濤のこの『清三家絶句』程に清詩宣傳に效果があつたとは想はれぬ。

## 星社の勃興

青厓、種竹、敬香三人の發意で、一大吟社を興さうではないかといふ計畫が出た。その旨意は舊來の老詩人はもはや我々の相手にするには足らぬ、新進の人々のみを以て吟社を組織し、詩壇に一生面を開かんといふのであつた。それより槐南一派に交渉したるに槐南もこれに贊同して、門下を率ゐて參加することに纏まり、かくて星ケ岡茶寮に會を開き「星社」と命名した。而して槐南は春濤親讓りの門下もあることなればこの吟社の主盟といふことに推し立てた。當初の參加人員は三十五六名であつたやうである。そして例の柏梁體聯句を試み、それを當時の諸新聞の文苑又は雜報に掲出したので中々目覺ましきものであつた。星社の唱和やら又は各家の詩作などは陸續と新聞に現るゝので、老詩人側は竟に詩壇から辭り去られたと評すべき有樣であつた。この星社がまづ明治の詩壇を賑かした大なる原動力であつたのである。隨つて星社には面白き逸話も少からぬが、今はそれに及ぶ餘裕がないから他日に讓つて置く。

## 青厓の出現

明治中程のことであつたが、三條公は日光の別莊に詩人連を招待されたことがある。その時、公は森槐南を通じて國分青厓を招待された。その時列席の面々は巖谷一六、矢土錦山、森槐南、國分青厓の四名で外に久保槐谷(此の人は公の祕書)都合五名であつた。この時、三條公の是等詩人に對する應接ぶりは巖谷以下はお役人にて公から見れば召使同樣だが、獨り青厓はお役人でないので却つて貴い、主賓として上席に据ゑられ誰よりも先に御盃を賜ふといふ安排で、槐南はビリコケに置かれ家來同樣であつたので當人にも餘り面白くなかつたと想像される。この招待の折に青厓の作つた『風雨觀華嚴瀑布歌』と題する長篇の七言古詩がある。その詩が數日後の「日本新聞」に掲げられた。副島蒼海は新聞にこの詩を一讀して大に感服されたと見え、幾日かの後にその次韻一篇を作り、それを未見の詩人たる青厓のところへ贈られた。青厓は蒼海のこの次韻に長々と評語を加へて「日本新聞」に掲出した。青厓のこの評語は長いから略してその末の方に左の如く言つて居る。

吾觀二近世人之詩一。非レ不レ佳非レ不レ工。只飣餖糟粕。絶無レ有二生氣一也。公此篇一氣斡旋。神完魄足。使二彼排青比白。詹詹自喜者一。却走三十里上矣。可レ稱二快絶一。高胤拜批。

右に謂ふところの「排青比白」まさに是れ森家傳來の詩風を罵倒したるものなることは何人にもそれと推せられる。青厓は森の詩天下に取りては隱然たる一敵國と見ねばなるまい。

一方青厓の側を見れば朝野に重望を負ふところの蒼海伯の次韻を得たるのみならず、その次韻の詩中にいふところの詩句は青厓をして九鼎大呂よりも重からしめた。蒼海のそれ等の詩句一二を摘み出せば左の如きものがある。

青厓居士胡爲者。欲下與二白也一爭中英風。

これは青厓の詩は李白と英風を爭ふものであると、李白取扱にしたのである。

借問天下若レ君有二幾人一。是文中虎與二人中龍一。

これは青厓は獨り詩人としてえらいばかりではない、その人物も亦えらい人であるぞといふのである。

當時蒼海の青厓におけるや、恰も韓退之の李長吉におけるが如きもので、彼の次韻を青厓に贈りたる後、蒼海は馬車を驅りて青厓を春日町

の草堂に訪問するに至つた。他日に至りて蒼海が六國糾合軍の黒幕であるかのやう、槐南に邪推されたのは是等の關係からである。兎もあれ、青厓はこの時分までは「評林」といふ時事諷刺の新體詩を創めた人として知られたに過ぎなかつたが、蒼海の次韻あつて茲に始めて青厓の詩名は世に知られたのである。

## 詩人の喧嘩

明治二十九年頃と思ふが、一新聞に「詩人の喧嘩」といふ見出しの記事が出た。その切抜きは左の如くである。

又しても詩人の喧嘩、と申して長屋の喧嘩にあらねば滅多に出刃庖丁を揮つて横合から飛び出ること莫れ。先づ膽玉を丹田に落ちつけて粹のあらましを聽くべし。頃は明治二十九年の一月、新玉の年立ち代りて四海波靜かに枝も鳴らさぬ平家詩人の御代太平と思ひの外、俊寛等一味の者共密に鹿ケ谷の山莊に會してより〳〵に謀叛の相談を凝らす由注進する者ありしにぞ、さてこそゆゝしき大事なれ、捨て置くべきにあらずとて、平家の御大將は狼狽一方ならず、絶間なく間者を入れて敵の樣子を探らせ、猶ほ道行く人の話にまで聞き耳立てゝ心を配る程に、隱れたるより現るゝはなくさすがの密計も次第々々に現れ來るこそ是非なけれ。そを如何にといふに、青厓山人主謀となり種竹山人其の外一味の詩人をかたらひて、新年宴會を名とし今年一月小石川指ケ谷の臥遊山房に會したるがそも〳〵謀叛の始まりとぞ聞えし。さて人々も大方に集まりしかば青厓は咳一咳徐ろに髯を撫でて言ふやう、今日密會の主旨は諸君も知らるゝ如く我々が組織する星社といふものはありながら槐南一派の勢力强くして星社は槐南が牽ゐ居るが如く世人に思はるゝこと殘念の至りなり、されば我々はこゝに同志を糾合して一大吟社を起し、星社を敵き潰し併せて槐南方を抑へつけグウの音も出ぬやうにしてやりたしと思ふなり。諸君の高慮如何と言へば皆々手を拍つて此の企に贊成し連判狀に迄加はりければ、青厓を總大將と推し山房の主人を兵糧方と定めて、後は酒三行はや興に入りて瓶子は平氏などとさゞめき笑ひける、此地指ケ谷なれば之を鹿ケ谷に擬し且つ鹿谷の音、六國に通ずる故之を六國糾合と名づけけるとかや。（下略）

右の記事に對照すべき事實はどんな事柄であつたかと云へば、詩評から始つた種竹と槐南との衝突に過ぎぬ。然れども詩學的に見れば、お互に諛評の交換をやつて居るより研學上どれ程益するところあるか判らぬ。右記事に對照すべき事柄は下文を見て了解せらるゝであらう。

及二予詩一出二槐南邊視一。爲二塗澤太甚一。性情何在一。吁予已不レ能レ寫二出其萬一一。又何有二於塗澤一哉。予因致二書槐南一曰。足下此言可二以銘二肺肝一。槐南復レ書曰。聞大吟壇。大興二六國糾合之師一。誓期二顚劉一。僕孤壘自保。固非二强秦一。然聞レ警奮躍。豈束レ手待レ斃耶。僕初以二大吟壇一爲二知己一。推襟送抱。無レ不二備至一。詎一旦參商。乃爾包二藏禍心一。令二人驚畏一。僕雖二庸愚一。何可レ不二自防一。予於レ是乎。始知二槐南前評之所レ爲。而駭二其居レ心之狹曲一也。予答書曰。青厓游毛詩。諸家所評隲。僕不レ能レ無二一二異辭一。更將二細論一之。是應二青厓之索一也。不レ意此事有下市出二三虎一之訛上。若二糾合六國誓期二顚瀛一云云。固是道聽塗說之言。幸勿二深勞一意。僕平生與二足下一友善。豈有二他心一哉。但其稽レ古攻レ文。僕所レ不レ辭。黨同

伐異。僕所レ不レ關。足下少加二明察一。（下略）

右は種竹が或る詩の評語中に爆發させたものであつて、前段に掲げた記事中の六國糾合の事柄もそれと推せらるゝであらう。能く以上の諸文を讀んで見ると彼の記事も全く跡方のないことでもないやうだが、しかし大體は槐南の疑心暗鬼であつた。槐南が左の如き詩を作つたのはその時のことだ。

人皆欲レ殺二李青蓮一。始信吾生是謫仙。玉不レ言桃花笑。春風偏在二草堂前一。

## 大正時代

大正の詩壇は國分青厓の天下であることは何人も知つて居るが、その以前の青厓を識つて居る人から見る時は、實に不可思議である。なぜなれば以前の青厓は詩の添削を賴んでも容易なことで見てくれる人ではなかつた。然るに大正時代となつて、吟社が次から次からといふ風に幾つも出來て、それ等の吟社に青厓はかゝさず出馬して詩の添削に忙殺されて居る。吾輩如きはその君子豹變ぶりに吃驚して居る。

先づ第一に詠社といふ吟社が興つたが、これが青厓が出山の始めである。その次に興つたは興社、その次には樓社、それから蘭社、龍社が興り、外に雅文會といふ田舍から送り來る詩を青厓が見てやる吟會がある。是等の吟社は毎月一回づつ會を開いて青厓に添削を乞うて居るのであるが、一社少くとも十二三人はあるであらう、そしてそれ等の連中は少くとも二首位の作詩を持つて來る、中には十首も慾張つて來る人もある、さうすると一吟社で少くとも三十首は添削してやらねばなるまい、それが六社あるとすれば全體として百八十首程添削する計算となる。かう見て來ると青厓翁の今の詩壇に對するや勤めたりと賞贊の辭を贈らざるを得ぬ。扨それが實際に如何程の功能ありやといふに至りては大なる疑問であつて、吾輩などは久しき以前から、「今の詩壇は青厓を荷馬車の馬の如く虐待して居る」といふ意見であつて、斷じて大詩人を遇する所以でないと思ふ。

話頭思はず脱線したが、話戻りて、曾て詩を添削したことのない先生が、右樣の虐待をさへ自ら甘んずるに至つたのはそも誰れのそゝのかすところであつたか、それを極く簡單に語つて見よう。

大正の初年と思ふが、田邊碧堂は突然青厓を訪問して、青厓にいふには、副島蒼海の詩を讀んで感ずるところあり、自今以後先生の添削を願ひたい云々。すると青厓は笑つて曰く、君の方は絶句は乃公よりも上手ではないか、只惡口を云つてくれといふのならそれは面白いから御相談にのつても苦うない……黄石公の張良に對するが如き安排だ。かくてその日は別れた。ところが意外にも青厓は翌日碧堂の宅へ出掛けて行つた。そして開口まづ君の詩をどんなに惡く云つても怒るまいなと念を押し、斯くて碧堂が平生得意がつて居た例の七絶を縱横に塗抹しそれぞれの理由を付した『碧堂絶句』の一册を碧堂に示した。碧堂これを見て愕然としたが、こゝは一つ張良となるべきところだナと怜悧にも如何にも〳〵と平伏して、愈々教を乞ふこととなつた。それから直ぐに添削とまでは參らぬ。又その次の日かには青先生又やつて來た。今度は藤井竹外の絶句をこれまた塗抹縱横に朱筆を加へたのを碧堂に示して曰く、君の絶句は竹外の絶句よりは上等だ、大に勉强し給へと激勵し、それから明詩劉青田、李夢陽、薛敬軒などを兩人にて會讀することとなり、それより福井學圃、上夢香、勝島仙坡の三人も參加することとなつて、青厓は學圃の詩を碧堂絶句同樣、メチャメチャに塗抹した。學圃はこの時、僕は詩はダメだ、もう止めようと嘆聲を發するに至つた。

こんな曲折を經て始めてこの三人が詩社を興した。それが抑も青厓出山の動機となつて、今日の如く終に詩壇の荷馬車馬をさへ辭せざるに至つたのである。奇なるかな青厓の出山や。

## 蒼海系の詩人

明治大正兩時代は我國において詩想の最高潮に達した時代であると吾輩は論斷する。顧ればこれから六十年程經て天明年代以來は山本北山一派の僞宋詩行はれ、その後八十餘年にして明治年代となり、森春濤一派の清詩時代となつた。しかしこの清詩時代の一角に副島蒼海は漢魏を高唱した。而してこの高唱に和したる者は、曰く國分青厓、曰く桂湖村、曰く石田東陵の三家である。かくの如き高き標榜は我國に詩ありて以來、未だ嘗て見ざるところである。

## 明治大正の三絶

昔は東都三絶、九州三絶、芳野三絶といふものがあつて、今日に至るまで世の中から忘れられずに傳唱されて居る。吾輩は今新たに明治大正兩時代の三絶を選定して玆に掲げ置く。若しも讀者の贊同を得て廣く傳誦さるゝやうなことになれば光榮の至りである。

### 明治三絶

嗚雁枯蘆天欲レ霜。烏江暮色正茫レ茫。
沛公孫子今予在。鼓レ棹中流弔二項王一。

右副島蒼海次韻弔二項王一

環郭皆山紫翠堆。夕陽人倚好樓臺。
香魚欲レ上桃花落。三十六灣春水來。

右森春濤高山竹枝

柳暗花明長短亭。片風絲雨記曾經。
美人山下萋萋草。吹二上征袍一舊樣青。

右木田種竹美人山下口占

### 大正三絶

聞昔天皇按劍崩。時無二李郭一奈二龍興一。
南朝天地臣生晚。風雨空山謁二御陵一。

右國分青厓芳野懷古

西風斷角動二邊秋一。草白雲黃寒日愁。
底事英雄始皇帝。長城徒自限二中州一。

右田邊碧堂萬里長城

浮雲直北接二三陸一。亂水正南趨二兩毛一。
何草不レ黃風浩浩。平原落日馬嘶高。

右久保天隨那須野

## 結論

以上吾輩が敍し來つたところを一括すれば、明詩を鼓吹してそれを剽竊したものは徂徠派である。宋詩を絶叫してそれを模倣したものは北山、寛齋などの一派である。清詩を主張してそれを踏襲したものは春濤、槐南以下である。剽竊、模倣、踏襲、まさに是れ一種の鸚鵡學に過ぎぬ。徂徠、北山、春濤、槐南等の亡者、吾輩のこの語を傳聞して如何に地下に叫くとも彼等の詩學は斷じて大雅の音でない。

是等の跡を承けて崛起した青厓詩人は如何、その持論は、左の一首にて看取することが出來る。

論詩寄似井土巖山　太白山人

言レ志稱レ詩三百篇　無邪垂レ教二千年
漢唐極變波瀾大　李杜齊レ輝日月懸
獨主二性靈一何太易　取論二神韻一豈其然
正葩眞傳溫敦旨　文字初應二不朽傳一

これに據りて見れば漢唐を極則とし、更に唐において、李杜を兩宗とするものであるといふことが出來よう。而して清詩の性靈とか神韻とかいふのは左樣無造作には參らぬといふのであらう。如何にも神韻派の空疎、性靈派の卑俗は免れざるところである。李杜は確かに兩宗とするに足る特色を有つて居る。李は才力、杜は學力、一は不用意に成り、一は刻苦に出づ。

一は天馬空を行き、一は部伍整然、一は老莊の如く、一は孔孟の如し。一は法たきが如く、一は法度森然、一は天仙の語を爲し、一は聖賢の語を爲す。一は豪語を爲し、一は寒乞の語を爲す。一は醉うて死し、一は饑ゑて終る。これ程特色の何人の目にも明白なるものはあるまい。今これを掲げて兩大宗とする。神韵と性靈とを以てするに執れぞや。

青厓の持論はかくの如しとして、扨その出山以後如何と問はゞ、僞唐詩、僞宋詩の餘毒と戰はざるべからず、清詩の殘粉剩香を拭ひ去らざるべからず、まづ以てこの二つが可なりの仕事である。しかのみならず、詩を學ぶ人達の素質が明治年代よりも低下して居る。これは西學心醉の結果として漢學を高閣に束ねたる餘響である。それに加ふるに、天才的人物は殆ど絶無である。その多くは凡くらである。これを農業に譬へて云へば、土地が膏腴でなく天候も亦良好でない。それが大正の詩壇であつた。かくては老農も復これを奈何ともすることが出來ぬといふが實況であらねばならぬ。故に青厓出山後の詩壇は前代清詩時代の殘粉剩香を拭ひ去つた位のものである。但し、これは中央詩壇のことで田舍向はずつと後れた風が吹き廻つて居るも知れず。

こゝに一寸附加へるのは支那のことである。漢詩の祖國たる支那においては詩は已に亡びたと云はれる。それは詩學を以て一代の泰斗と呼ばれたる森槐南は、嘗て支那から歸りたてに作つた「戊戌歲暮、雙芝仙館剪燭會席上作歌」といふ古詩の中に曰く、「憶昨海外觀レ風還。禹域詩荒堪二嗤嘲一。徒工二弄雪嘲風辭一。叩二其根器一默如レ啞」と。これ明かに支那にて詩の亡びたことを道破したのである。槐南の宗旨とするところは已に讀者の知らるゝ如く、漢魏にあらず、唐宋にあらず、元明にあらず、清朝である。その標榜は一番低いところであつた。一番標榜の低い先生の眼に映じたところで、已に詩が亡びたと云はれるに至つては、支那の詩は如何に惱れなものであるかといふことが察せらる。されども槐南が、それ程徹底した詩眼を有つて居たかどうかも考へて見ねばなるまい。しかし左樣なる暇がないから槐南の說を大割引して聽くとして、兎もかく支那の詩は衰微したらしい。それは西洋學の侵入とか、戰爭とか色々な原因でそんな有樣になつたものと想はれる。それでも流石に文字の國として古書も多く、新書も續々として出で、遺老もあれば遺風もあつて、一概に槐南のいふが如く片附けて了ふのは早計であると思ふ。

吾輩の明治大正漢詩史概觀の結論は前段を以て足れりとする、こゝに擱筆するに臨み、一言の忠告を今の詩壇に與へようと思ふ。乞ふ、詩壇の諸君、吾輩の一語を聽き給へ。諸君が青厓詩人を荷馬車の馬視するは言語道斷である。試みに諸君に問はん、「青厓をして一代の師たらしむると、百代の師たらしむるとは執れぞ」諸君は必ず答ふるであらう、「百代の師たらしむるに若かず」と。然らば諸君は詩社、興社、樸社、蘭社、雅社、雅文會等の添削（現在の如き添削は詩を學ぶ正法でもない）を青厓に謝絶せよ、而して自今以後添削の時間を青厓より奪ふことを止めよ。これ我が詩壇が青厓をして百代の師たらしむる所以である。かくて青厓が優游自適、以て百代の師たるべき詩篇を天下後世に貽すと否とは、繫りて青厓の一心に存す。乞ふ三思せよ。

井土靈山

昭和四年四月十二日印刷
昭和四年四月十五日發行

現代日本文學全集　第三十七篇

著者代表　島崎藤村

編纂兼發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番
一一一一番
二二二二番
三二一番
四番

繁榮社秀英舍印刷

# 現代日本詩集
# 現代日本漢詩集

杉浦非水裝幀

改造社版